前号を読んで

ビジョンを持った試行錯誤は必要不可欠

臼山利信
人文社会科学研究科講師

前号の特集を読んで率直に感じたのは、各学群・学類の教育現場は今大きく変わろうとしているという確かな息づかいである。この変化は、大学が時代や社会の大きな変化の荒波に晒されている以上、避けては通れない道である。ただ大切なことは、自らがビジョンを持って自律的に変化するのか、あるいは外圧の対応に追われる中で他律的に変化させられるのか、どちらの道を選択するのかという点に尽きると感じる。

自らが変わろうとする場合、ビジョンを持った試行錯誤は必要不可欠である。仮に失敗することがあっても良いと思う。その失敗や反省を糧にして、今度はより確かな軸足を持って軌道修正できるからである。ここには、新たな展望と希望が潜在している。しかし逆に、ビジョンのない試行錯誤ほど苦しくつらいものはないと思う。まさに「労多くして益少なし」である。

一般世間では、どんな組織にあっても「長の一念が大事である」とよく言われる。それは、良きにつけ悪しきにつけ、将の勇気も弱気もやる気もすべて卒に伝播するからである。その意味で、前号の特集記事は全体として非常に勇気づけられるものであった。学生のために今何が必要なのか、また何ができるのかを真剣に考え、自負心を持って取り組んでいる教育現場の様子が、あるいはとにかく良い教育環境を全力で整備していこうという長の熱き思いや覚悟のようなものがひしひしと伝わってきた。

私自身、微力ながら、人文学類言語学主専攻露語学コースを運営する責任教員として、魅力あるコース教育づくりを目指して様々な試みを行っている。国際交流活動を生かした教育運営は、その一例である。具体的には、ロシア・サンクトペテルブルグ国立大学との交換留学制度及び単位互換制度を活用し、学類生が一年間留学しながら、四年間で卒業できる体制を整えたことである。来年三月、この制度を利用した第1号のコース学生が卒業する予定である。今後も自身の持ち場で、さらに知恵を絞り、工夫を凝らして、学類教育の改善・発展に少しでも寄与したいと決意している。

（うすやま　としのぶ／ロシア語学）